

プトゥンのガナチャクラ儀軌
『聚輪並びに勇者の饗宴の作法儀軌
「大楽遊戯」』和訳研究 その1

静 春 樹

序

チベット仏教の大学匠プトゥン (*Bu ston Rin chen grub* 1290~1364 A.D.) については、多くのことが語られている。それを要約して [田中1993:70~72] は、以下のように述べる。

(プトゥンは) ナルトン寺に蒐集されていた『チベット大蔵経』の写本を複製し、さらに稀覯本や自らの翻訳を増補してシャル寺に収めた。有名な『プトゥン仏教史』は、シャル寺の『大蔵経』目録の序文として1322年三十三歳の時に著された。(中略) プトゥンの時代は、チベットに影響を与え続けたインド仏教が、イスラムの侵入によってまさに滅びんとする時期に当たっていた。これ以後インドから新たな仏教が伝えられることはなく、当時までに伝播していたインド仏教の総体が、その後のチベット仏教の源泉となったのである。このような時代にプトゥンは、『チベット大蔵経』の編集を通して、インドから伝播した仏教を集大成する。

このようにプトゥンが残した著作の多くが今後の研究者による解明を待っている。本論との関連で言えば、その最晩年(七十二歳)に作成された浩瀚な『聚輪並びに勇者の饗宴の作法儀軌「大楽遊戯」』(以下『プトゥン聚輪儀軌』)⁽¹⁾ は、彼が諸々のタントラ、およびインドの阿闍梨たちの手になった註釈書、単独の聚輪儀軌、教誡などを広範囲に亘り精査した上で、以下に述べる枠組に従いそれらの多くを網羅し編集する形で出来上がった著作であって、インド後期密教における集団的修法(聚會)の全体像および具体相を知る上で欠かすことは出来ない文献と言える。

インドの阿闍梨 *Mañjśrīkīrti* の『秘密総儀軌心髓莊嚴』および『サンヴァラ *Vajrapāṇi* 註』と『五種三昧耶』などに準拠して、プトゥン自らも『プトゥン聚輪

儀軌』の中で、「肉と酒と等至（性瑜伽）の三つの供養を充たさなければ聚輪は成立しない。まさにその三つの享受なくしては聚輪の所作とはならない」と述べる。さらにプトゥンは、『愛欲論』の中で述べられている如き和合の方便を知った」金剛阿闍梨が聚会の導師となって施主から献じられた女性と瑜伽（真実供養）を為すという趣旨の記述を行っている。

このように「食欲行」を根幹とする後期密教の思想的枠組に忠実に、インド撰述の文献を下敷きにして構成されたマニュアルが『プトゥン聚輪儀軌』である。ところで最初に戻って、「プトゥンのガナチャクラ儀軌」という本稿のタイトル自体が一部のチベット仏教研究者に対して、ある種の違和感を与えることは否めないであろう。しかし上に述べた筆者の引用・要約は決して間違いではない。では「肉と酒と等至（性瑜伽）の三つの供養」を内容とする聚輪儀礼を果たしてプトゥン本人はチベットの地で自分のマニュアルどおりに行き、また他者によって行われると考えたのであろうか。まさしくこの点に当該儀軌についての根本問題が横たわっている。

この序文では金剛乗の根本典籍である『真実撰経』が成立して直ぐの時期から始まったと想定される集团的修法の歴史的な経過、およびチベットにおけるその展開に簡単に触れておきたい。私見では、この歴史的展開はインド密教研究の現時点ではかなり蓋然性の高い仮説であるが、今後の研究によってさらに実証していかねばならないものである。

筆者のこれまでの研究によれば、インド後期密教が展開したタントリストたちの集会（melā）は、それが現実のものであれフィクションであれ、プトゥンがこの書に編集した内容からは想像も出来ない程に猥雑で今日の市民社会の良識から見て残酷な行為に満ちたものであったと考えられる⁽²⁾。集会の場で行われる身体の排泄物や人肉の摂取儀礼、人身供犠とその肉の摂取儀礼、外教徒の調伏（殺害）といったタントラの中で説かれた、仏教タントリストが遵守すべき三昧耶として姿を見せるおどろおどろしい行為規範がそれである。こうした「タントラに現われる聚会」つまり集会（melā）が、三昧耶の側面をトーンダウンさせ、他方で愉快的祝祭的性格を強めて、修法・祝祭複合体となった饗宴が聚輪儀礼である。少しく水増しされたとは言え、こうした饗宴の場で行われる諸々の行為が正統バラモン思想に反することはもちろん、仏教タントリストたちの精神性が、伝承された「律蔵」の文言どおりの遵守を求める声聞乗の比丘や『毘盧遮那現等覺』までのインド初期密教徒たちの精神性とは大きく相違することは明らかであろう。しかし問題は、多くの金剛乗の論師たちがそれぞれの部派で具足戒を受けた比丘であったことであり、

Vikramasīlā 大僧院の大学匠であった *Abhayākaragupta* のような密教僧がこのような「左道」的な儀礼を躊躇うことなく宣揚していることである。

インド後期密教の洗礼をもろに被ったチベット仏教史には、この「声聞の律儀」と「金剛乗の三昧耶」の二律背反を地で往った人物もいる。それが 11c 中葉から 12c 初頭に生きた、チベット仏教を代表する「悪玉」とされる Rwa 翻訳官 *Rdo rje grags* である。彼の言辞とされるものを [羽田野1986b: 274] から引用する。

酒肉を受用するのは聚輪 *gaṇacakra* である。女性に承事するのは羯磨印である。三昧耶を壊損する者を度脱するのは真言の三昧耶である。とかく承知している。しかりとすれば、持律者比丘と何の矛盾があろうか。

しかし、*Rdo rje grags* のこの言辞は金剛乗の立場の宣揚でこそあれ、そこからの逸脱では決してない。強いて彼の宗教的实践に責められる点があるとすれば、インドでは、金剛乗の阿闍梨たちがヒンドゥータントリスト（一例として、*Kaula*）を始めとする三宝を毀損する輩を阿閼や阿弥陀の浄土へ度脱したのに対して、*Rdo rje grags* はマルパ翻訳官の嫡子 *Marpa Darma mdo sde* などの主に「商売敵」となった同業の仏教タントリストたちを度脱したとされる点であろうか。

本題に戻り、酒肉の饗宴と性瑜伽の実践は保持し、「五甘露」と「五鈎」(*pañcāṅkuśa*)⁽³⁾ にはさりげなく触れるものの、プトゥンはインドの文献から注意深く取捨選択して、〈七生人〉(*sapta varta*) の供犠や難調なる輩の殺害などの三昧耶についてはこの書で言及するところがない。他にも彼は、多くのインド撰述文献の中で、タントラの過激な文言および註釈者がそれらタントラにあくまでも忠実に祖述した註釈箇所は注意深く篩い分けている。

実際に行うための儀礼の指南書がマニュアルである。マニュアルとして説かれている聚輪儀軌が前提するのは次の事柄である。つまり、施主の要請に応じて集会の導師である金剛阿闍梨を始めとして、ペアになった瑜伽者と瑜伽女、時には僧伽の七衆も参加して特定の日に特定の場所に集まって行われる集会が仏教徒たちの世界に存在していることである。その点で「タントラに現れる聚会」とは違った位相にある聚輪儀軌をまとめたプトゥンは、世間的な配慮と儀軌としての実行可能性という基準に従っていると言える。繰り返すと「タントラに現れる聚会」はその過激さが水で薄められているのである。この点からすれば、『プトゥン聚輪儀軌』は、まさしくこのようなマニュアルに依って集会が実際に行われる段階での文献として位置

づけられよう。

次に、集団的修法の展開の歴史では、聚会における諸々の設営と現実的行為のほとんどすべてが観念化されて導師の所作・作法が中心の聚輪供養「法要」となってしまう段階が想定される。これは今日のチベット仏教が行なっている「聚輪供養」の姿である。それは現代チベット仏教の各派で授けられる「秘密灌頂」「般若智慧灌頂」が実際の性瑜伽という「左道的」な行為を観念操作で代替されているのと全く同じ位相にあると言えるものである⁽⁴⁾。プトゥン以後のチベット仏教は「酒と肉と等至」を不可欠な構成要素とする聚輪儀礼をどのように消化して、実践体系に組み込んで行ったのであろうか。この段階へいたる過程を明らかにするには、チベット仏教が独自に展開した聚輪儀礼の研究が為される必要がある。まさしくプトゥンが言う「チベットのグルの作法 (bod kyi bla ma'i phyag bzhes)」の具体相を解明しなければならない。さらにはそれと平行して、インドで仏教が消滅した後も、独自の展開を遂げた周辺部分、例えばネワール仏教における聚輪儀軌の研究が必要となろう。

このように実際に行う修法から「法要」へ観念的に代替されていく傾向はそれ自体大きな研究課題となるものであるが、それは現在の筆者の力量を越えた問題である。しかしこの『プトゥン聚輪儀軌』には、おどろおどろしい三昧耶の実践に代わって、詳細なバリ儀礼が説かれていることなどを考慮すると、チベット仏教において、集団的修法の実際の行為が観念的に代償されて、「法要次第」に変化していく方向はほぼ予見される。その意味でも『プトゥン聚輪儀軌』の訳出は実践面でのインド密教の受容とその後のチベット独自の展開という、これまで研究対象となりにくかったチベット仏教のこの分野の研究にも有意義であると思われる。

それでは最初の設問に戻ろう。つまり彼の儀軌がマニュアルとして作成されたものであるとしても、その実践はインドの地においてならばいざ知らず、自らは戒律復興の気運の中に身を置き、しかもシャル寺の住持であったプトゥンの息のかかる範囲で為しえたであろうかという疑問である。答えは否であろう。

大方の意見に従って、彼の時代のチベットでは、その編集した儀軌通りに実際の所作を伴う聚輪儀礼が行われることは無かったとするならば、この文献を編著する目的はインドで作成された数多くの聚輪儀軌の集大成としての意味に限定されるであろう。プトゥンはインドで行われた「戲論の行」をもその最晩年にマニュアルとして集成したことになる。まさしく金剛乗の比丘プトゥンは、冒頭で引用した田中公明氏の言明どおり、インドから伝播した仏教のすべてを集大成したのである。

当儀軌は、大きくは加行・正行・随行の三部分に分かれており、それに付則と奥書が加えられた構成となっている。奥書でプトゥンは儀軌作成に際して依拠したテキストの主なものを列挙している。もちろん聚輪儀礼を説いたインドの文献はこれらに限られることなく、他にも数多くの曼荼羅儀軌などに散在している。しかしプトゥンが挙げている文献はいずれも聚輪研究に欠かすことが出来ないものばかりである。本稿では、先ず最初に当儀軌全体のシノプシス⁽⁵⁾を提出する。引き続いて加行の部を訳出する。正行以下は随時発表予定である。

1. プトゥン『大楽遊戯』シノプシス

総論	385b1
(1) 目的	385b6
(2) 人	386a1
(3) 時	387a4
(4) 場所	387a7
(5) 資具	387b3
(6) 儀軌の内容	387b5
I 加行(準備)	387b5
1. 会処の障碍の除去と祝福	387b7
2. 会処の荘嚴と浄化	388a1
3. 必需品の準備	388a3
(1) 曼荼羅自体の準備	388a4
①曼荼羅を聚会曼荼羅とする場合	388a4
②図絵曼荼羅の場合	388a6
(2) 曼荼羅以外の準備	388a7
①座の準備	388b1
②供物の準備	388b7
③資具の準備	389a7
4. 聚会導師の選定	389b2
5. 入聚会処の儀則	389b7
(1) 門衛阿闍梨の指定	390a1
(2) 羯磨金剛者の指定	390a3

(3) 沐浴の所作	390a4
(4) 門衛阿闍梨への懇願	390a4
(5) 許可の授与後に入門	390b5
(6) 入門後の着座の定め	390b6
6. 香曼荼羅の奉獻と請願	391a4
7. 違犯した三昧耶の修復	392a4
8. 守護輪の観想	392a6
II 正行	392a7
1. 曼荼羅の成就	392a7
(1) 曼荼羅を聚会曼荼羅とする場合	392a7
(2) 図絵曼荼羅の場合	392b6
2. 広大供養	392b7
(1) 外供養	393a1
(2) 意所成の供養	393a3
(3) 内供養	393a6
(4) 秘密供養	394a6
(5) 讃歎供養	394a6
(6) バリ供養	394a7
(7) 聚会供養	395a5
(8) 真実供養	398b2
(9) 金剛歌と舞踏の供養	399a4
III 随行	402b6
1. 施主による所願成就の請願	402b7
2. 施主による施物の奉獻と廻向と請願	403a4
3. 施主に対する祝福	404a7
4. バリ供養	404b4
5. 曼荼羅の揆遣	405b1
6. 堪忍の請願と還着の奏上	405b3
IV 付則（『Dombiheruka教誡』）	406a1

V 奥書

407b1

2. 和 訳

総 論

[385b1] tshogs kyi 'khor lo dang dpa' bo'i ston mo'i lag len gyi cho ga bde chen rnam rol zhes bya ba / bla ma dang dpal rdo rje sems dpa' la phyag 'tshal lo /

sgrib gnyis spangs pa'i bde chen rol bas 'khor ba'i sdug bsngal rnam bcom zhing / tshogs gnyis rdzogs pa'i bde chen rol bas myang 'das mchog gi bde la rol / thugs rje'i mdzad pa'i bde chen rol bas sems can bde la rol mdzad pa / don gnyis mthar phyin bde chen rol ba bla ma rdo rje 'chang la 'dud / rnal 'byor bla med rgyud kyi dgongs pa'i don / sgrib pa sbyong zhing tshogs gnyis rdzogs pa'i thabs / tshogs kyi 'khor lo dpa' bo'i ston mo yi / lag len cho ga mdor bsdus gsal bar bri / 'dir rnal 'byor bla na med pa'i rgyud kyi dgongs pas dam tshig gi nyams chags kha skong bar byed pa dang / tshogs rdzogs par byed pa dang / dpa' bo dang mkha' 'gro ma mnyes shing bar chad sel bar byed pa la tshogs kyi 'khor lo bskor ba'i cho ga dgos pas de dag 'dir brjod par bya'o /

聚輪と勇者の饗宴の作法儀軌にして、「大楽遊戯」と名づける書。

グルと金剛薩埵に頂礼いたします。二障碍を断滅した大楽の遊戯⁽⁶⁾によって輪廻の苦を克服し、二資糧を円満する大楽遊戯により経験を超越した最勝の楽に遊戯すべし。悲を為される大楽遊戯により衆生を楽に遊戯させ給い、二利を究竟する大楽の遊戯を為されるグルと持金剛に頂礼します。無上瑜伽の密意の義であり、障碍を清浄にして二資糧を円満する方便である聚輪と勇者の饗宴の作法儀軌を要約して明瞭に叙述しよう。

さて無上瑜伽タントラの密意により三昧耶の違犯を修復⁽⁷⁾し、資糧を円満し、勇者とダーキニーを喜ばせて、危難を取り除く上で聚輪を転じる儀軌が必要であるからそれらをこの場で述べよう。

(1) 目 的

de la tshogs kyi 'khor lo'i cho ga dang / dpa' bo'i ston mo'i cho ga gnyis
 gang byed kyang / de la dgos pa dang / gang zag dang / dus dang / gnas
 dang / yo byad dang / cho ga'i khyad par dang drug gi dang po ni / dam
 tshig nyams pa la sogs pa'i sdig pa thams cad dag [386a] pa dang / tshogs
 rdzogs par byed pa dang / spyod pa byed na ting nge 'dzin brtan por byed
 pa'i don du bya'o /

そこで聚輪儀軌と勇者の饗宴儀軌の二つのものを為すのであるが、それについては、目的と人と時と場所と資具と儀則の区別としての六つである。第一〔の目的〕とは三昧耶を損なうこと等の罪過のすべてを清浄とすることと資糧を円満することと行を為すに際して三摩地を堅固にするために為すのである。

(2) 人

gnyis pa ni / sdom 'byung las /
 sbyin bdag dad pa chen po yis // khyim gnas yang na dge tshul'am //
 slob dpon dge slong nyid kyang ste // kha cig 'jig rten na bstan la //
 gnas pa'i dge slong slob dpon no // kha cig 'jig rten yon tan 'phags //
 mngon shes thob pa nyid kyang ste // 'di rnam nang na gtso bo mchog //
 sbyin bdag dad pa kha cig go //
 zhes pas / tshogs kyi gtso bo sa thob pa'i byang chub sems dpa' yin na
 yang rab yin pas kun gyi gtso bor bya / sa ma thob pa gzhir byas la / de
 nyid bcu shes pa la sogs pa'i slob dpon gyi mtshan nyid dang ldan pa dge
 slong rab / dge tshul 'bring / dge bsnyen tha ma yin pas gnas gcig na gsum
 yod na dge slong yod bzhin du ge tshul dge bsnyen gyis byar mi rung / dge
 slong dge tshul yod bzhin khyim pas tshogs kyi gtso bo / dbang bskur /
 rab gnas sogs slob dpon gyi bya ba gang yang byar mi rung ngo / dge
 slong gzhir byas la dbang gis rgan pa / de nyid bcu shes pas tshogs kyi
 gtso bo bya'o / bsnyen rdzogs kyis rgan pas ma yin zhing / dbang gis
 rgan pa'i dge slong yin yang de nyid bcu mi shes pa dang / dbang gis rgan
 zhing de nyid bcu shes kyang rgas 'khogs nas rdo rje slob dpon gyi bya ba
 mi [386b] nus pa yin na / de nyid khyim gzhan du skal ba drangs la tshim
 par bya'o / gral 'og tu gzhag mi rung bar dus 'khor nas bshad do / sdom
 'byung las /

gtsang zhing dul dang dga' ba'i sems // sred dang gti mug rnam par
spangs //

thams cad mtshungs par lta ba ni // las kyi rdo rjer rab brtag //

ces gsungs pa ltar / las kyi rdo rje tshogs kyi 'khor lo'i las kyi cho ga
thams cad la byang zhing mkhas pa / spros ba dang brtson 'grus dang
ldan pa'o / 'du bar 'os pa gzhan rnams ni / dbang bskur ba thob cing
dam tshig dang sdom pa la gnas pa / lam rim pa gnyis kyi ting nge 'dzin
dang ldan pa / brda dang brda'i lan / phyag dang phyag rgya'i lan la sogs
pa tshogs kyi 'khor lo'i cho ga la byang pa gzhir byas ba la / dkyil 'khor
gcig gi tshogs kyi dkyil 'khor tshul du sgrub na / dkyil 'khor gcig tu dbang
thob pa / dkyil 'khor de'i rim pa gnyis kyi ting nge 'dzin gsal ba / dkyil
'khor de'i lha grangs dang mnyam pa'i dpa' bo dang rnal 'byor ma ste /
gsang 'dus mi bskyod rdo rje'i yin na / dpa' bo nyi shu rtsa gsum / rnal
'byor ma dgu / ye shes zhabs lugs yin na / dpa' bo dgu / rnal 'byor ma
bcu / dgyes rdor yin na / tshogs kyi gtso bo dpa' bo gcig / rnal 'byor ma
dgu / bde mchog yin na / dpa' bo nyi shu rtsa lnga / rnal 'byor ma sum
cu rtsa bdun / dus 'khor la rgyas par na / lha grangs dang mnyam pa'am
/ rigs bsdus na / dpa' bo so bdun / dpa' mo so bdun te / mdor na / rang
rang gi dkyil 'khor gyi lha grangs dang mnyam pa'am / de med na / dpa'
bo gtso che pa'i tshogs 'khor yin na phyag rgya ma gcig med du mi rung
/ gzhan rnams ting nge 'dzin gyis sprul / dpa' mo gtso ba'i tshogs 'khor
yin na'ang dpa' bo gcig med du mi rung / gzhan rnams ting nge 'dzin gyis
sprul / [387a] lha'i rnal 'byor mi 'dra ba'i tshogs kyi 'khor lo yin na / lha
grangs dang mnyam pa'i nges pa med de / dus par 'os pa'i dpa' bo dang
rnal 'byor ma lnga yan chad gang tshogs te / de la'ang dpa' mo nyung
yang gcig nges par dgos la / dpa' bo nyung yang gcig nges par dgos so /
dpa' bo dang dpa' mo'i ston mo yin na / tshogs kyi gtso bo'am / tshogs
kyi gtso mo la shes rab bam thabs gcig nges par dbul dgos par bde mchog
stod 'grel dang man snyer bshad do / bde mchog stod 'grel du / dkyil
'khor gzhan du dbang bskur ba yin na khyim gzhan du tshim par bya dgos
par bshad pa ni / dkyil 'khor gcig gi tshul du sgrub ba'i dbang du byas
pa'o / las kyi rdo rje mtshan nyid dang ldan pa dang / gzhan 'dus bar 'os

pa gang yod do /

第二は『サンヴァローダヤ』の中で、「大いなる信心をもつ施主が、在家あるいは沙弥あるいは阿闍梨である比丘〔の内から選ぶのであって〕、ある者は世間における教誡に住する比丘の阿闍梨である。ある者は世間の優れた徳〔を具え〕神通を獲得している者であって、こうした人たちの中から浄心の施主が一人を最勝なる指導者に〔なす〕」⁽⁸⁾と説かれているから、聚会の導師が地を獲得した菩薩であるならばさらに申し分ないので全員の導師となすべし。

地を獲得していない者を指導者にして為すに際して、十真実を知る等といった阿闍梨の特質を具えた比丘が最勝であり、沙弥は中、優婆塞は下であるから一つの場所に三人が居る時には比丘が居ながら沙弥や優婆塞によって〔聚会を〕為すことは相応しくない。比丘や沙弥が居ながら在家者が聚会の導師〔として〕灌頂や善住式 (pratiṣṭhā) など阿闍梨の所作であるものを為すことは決して相応しくない。

比丘を指導者となすに際して、灌頂では上臘であり、十真実を知っているから聚会の導師となすのである。承事に完璧な上臘ではなくて、灌頂では上臘の比丘ではあるが十真実を知らない者と灌頂で上臘であり十真実を知っているが老衰の故に金剛阿闍梨の所作ができない者の場合には、その者〔たち〕は別な家で献じられた分け前で満足すべきである。

〔阿闍梨を〕下位に置くことは適切ではないと『カーラチャクラ』で説かれている。『サンヴァローダヤ』の中で、「清浄にして善調で歓喜の心〔を持ち〕強欲と癡を断じて一切を等しく観察する者は羯磨金剛者と見られる」⁽⁹⁾と説かれている如くに、羯磨金剛者は聚輪の行為の儀則すべてに関して適切にして善巧であって、快活さと精進を具えた者である。

他の〔聚輪に〕集まるに値する者とは、灌頂を既に受けており、三昧耶と禁戒に住して、二つの道次第の三摩地を具え、符牒と符牒のお返し、印契と印契のお返しなど聚輪の儀則に適った者を根本とするのである。ある曼荼羅を聚会曼荼羅の方軌として成就する場合には、ひとつの曼荼羅で灌頂を受け、その曼荼羅の二次第の三摩地が明らかである〔そのような〕その曼荼羅の尊格と等しい数の勇者と瑜伽女である。『秘密集会』の阿閼金剛の場合⁽¹⁰⁾（聖者流）であれば、勇者は二十三人で瑜伽女は九人であり、ジュニャーナパーダ流⁽¹¹⁾であるならば、勇者は九人で瑜伽女は十人である。『ヘーヴァジュラ』の場合⁽¹²⁾は、聚会の導師である勇者一人と瑜伽女が九人であり、『サンヴァラ』の場合⁽¹³⁾ならば、勇者は二十五人、瑜伽女は三十七人である。『カーラチャクラ』では、広大であれば⁽¹⁴⁾尊格の数と等しいか、あるいは

部族にまとめるならば男性勇者は三十七人、女性勇者は三十七人である。要約すればそれぞれの曼荼羅の尊格の数と等しいか、あるいはそうでない場合であっても男性勇者が導師である聚輪の場合には印契女が一人も居ないのは相応しくない。他の者たちは三摩地によって化作すべし。女性勇者が導師である聚輪の場合でもまた男性勇者が一人も居ないことは相応しくない。他の者たちは三摩地でもって化作すべし。

本尊瑜伽と同じではない聚輪の場合には、尊格の数と同じであることは必須ではなく、集めるに値する勇者と五人以上の瑜伽女を集めるのである。その場合でも女性勇者が少なくとも一人は必要であり、男性勇者が少なくとも一人は必要である。

男性勇者と女性勇者の饗宴の場合は、「聚会の男性導師あるいは女性導師に対して般若母あるいは方便を一人必ず献ずる必要がある」と『現誦十万所出小タントラ撰義註釈』と『アームナーヤマンジャリー』で説かれている⁽¹⁵⁾。『現誦十万所出小タントラ撰義註釈』で、「他の曼荼羅で灌頂を受けている者の場合には、別の家で満足させなければならない」⁽¹⁶⁾と説かれているのは、ある曼荼羅を聚会曼荼羅方軌として成就する場合に限ったことである。

〔以上が〕羯磨金剛者の特質を具えた者と他に集まるに値する者〔たちについて〕である。

(3) 時

gsum pa ni spyir yar ngo mar ngo'i tshe brgyad dang bcu bzhi dang bco
lnga la spyi rigs nas bsngags shing / khyad par bde mchog pa ltar na /
dgun zla 'bring po nas brtsams te / zla ba so so'i yar ngo mar ngo'i tshes
bcu / khyad par dus 'khor pa ltar na / sangs rgyas sangs rgyas pa'i dus
sa ga'i nya'am / sangs rgyas kyis dbang bskur ba'i dus nag pa'i nya'am
/ gzhan zla ba bcu po'i nya so so la'am / de la ma grub na / brgyad dang
bcu bzhi la bya bar gsungs shing / khyad par rgyud 'chad pa'i dus dang
/ dbang bskur dang / rab gnas kyi dus su bya bar gsungs so / spyir
'byor pa rab kyis zhag re re zhing / 'bring gis zla ba re re la / tha mas lo
gcig nang du lan gcig ma grub na / dam tshig nyams par 'gyur bar dam
tshig lnga pa nas bshad do / yang sgos zhig gi dus ni mtshan mo'i rgyu
'grul chad pa'i dus bya'o /

第三は一般的に上弦・下弦の八日と十四日と十五日の内、何れかが奨められてい

て、とくに『サンヴァラ』の如くならば、パウシャ (*pausa*) 月から始めて、各月の上弦・下弦の十日〔である〕。とくに『カーラチャクラ』の如くならば、仏と仏教徒の節会であるヴァイシャカ (*vaiśakha*) 月の十五日あるいは仏が灌頂された三月十五日あるいは他の十ヶ月の各十五日に、またはそれができない場合には、八日と十四日に為すべしと説かれており、とくにタントラ講説の時と灌頂と善住式の時に為すべしと説かれている。一般的には「優れて財をもつ者によって毎日、中位の者では毎月、財の乏しい者〔でも〕一年の内に一回もしないならば三昧耶への違犯となる」⁽⁴⁷⁾と『五種三昧耶』で釈説されている。さらに一日の特定の時間については夜の〔人の〕往来が絶えた時に為すべきである。

(4) 場 所

bzhi pa ni / sdom 'byung las /

rang khyim rnam dang sbas pa'i gnas // dben zhing yid du 'ong ba dang //

ri [387b] bo tshang tshing ri sul dang // yang na rgya mtsho chen po'i 'gram //

dur khrud dang ni ma mo'i khyim // chu bo 'dus pa'i dbus dag tu //

dkyil 'khor yang dag 'jug bya ste //

zhes gsungs pas / las dang po pa yin no / rang gi khyim mam / sa phug

dang brag phug la sogs pa sbas pa'i gnas / skal ba dang mi ldan pa'i gang

zag gis dben zhing / rang gi yid dang rjes su mthun pa'i gnas su khang pa

rim pa gsum dang ldan pa'am / ting nge 'dzin la brtan pa thob pa yin na

/ ri bo'i rtse dang / nags tshang tshing gi nang dang / ri sul dben pa dang

/ rgya mtsho'i 'gram dang / gdod nas grub pa'i dur khrud dang / ma

mo'i khyim la sogs pa dben pa'i gnas su'o / drod thob pa yin na / yul nyi

shu rtsa bzhi la sogs par ro /

第四〔の場所について〕は、『サンヴァローダヤ』の中で、「自分の住居や人けが無く意に適った隠された場所や山中・稠林・峡谷あるいは大海の岸边、屍林や母神の廟や河が集まった中州において曼荼羅に正しく入れしめて」⁽⁴⁸⁾と説かれているので〔これは〕初学者の場合である。〔つまり〕自分の住居あるいは地面の洞窟や岩の洞窟等の隠された場所で、福分を持たない輩から離れていて、自分の意に適った場所で三層の堂廟であるか、あるいは三摩地の堅固を得た場合であれば山頂・森・稠

林の中や人けのない山中の峡谷や大海の岸边や当初から成就している屍林や母神の廟等といった人けのない場所〔で行うのである〕。暖位を得た場合であれば二十四の地方（ピータ）などである。

(5) 資 具

lnga pa ni / mchod yon / zhabs bsil / nyer spyod lnga la sogs pa'i mchod pa dang / sbrang chang / bur chang / khu ba'i chang la sogs pa'i chang dang / lcags kyu lnga la sogs za rung ba'i sha dang / bza' ba dang / bca' ba dang / ta mbu la dang / rnga dang / dung la sogs pa'i rol mo dang / gdan cha dang snod dang sder la sogs pa 'og tu dgos pa'i yo byad thams cad gsog / rnal 'byor pa so so'i rgyan dang / rdo rje dril bu dang da ma ru dang / ka pā la la sogs pa'i yo byad thams cad sta gon bya'o /

第五〔の資具について〕は、闍伽 (*argha*) や洗足水 (*pādya*) と五供物 (*pañco pacāra*) を始めとする供物と蜂蜜酒・甘蔗酒・果実酒などの酒と五鉤 (*pañcāṅkuśa*) 等の食べるに値する肉と硬食 (*khādya*) と軟食 (*bhojya*) や菹醬 (*tāmbūla*) と太鼓や螺貝等の楽器と座具と鉢や皿など後に必要な資具のすべてを置くべし。瑜伽者はそれぞれの装身具と金剛杵と鈴とダマル〔太鼓〕と髑髏杯を始めとする資具万端を準備すべし。

(6) 儀軌の内容

drug pa la / sbyor ba / sngos gzhi / rjes gsum las / dang po la / gnas khang gi bgegs bsal zhing shis par bya ba / gnas khang brgyan cing byi dor bya ba / dkyil 'khor 'du bya ba / tshogs kyi gtso bo gzhug pa / tshogs khang du 'jug pa'i cho ga / maṇḍala phul te gsol ba gdab cing gnang ba sbyin pa / dam tshig nyams chags dag pa'i phyir yi ge brgya ba'i sgom bzlas bya ba / bar chad bsrung ba'i phyir srung 'khor sgom pa dang brgyad kyi dang po ni /

第六は加行（準備）と正行と随行の三つの中で、第一〔の加行〕については、1. 会処の障碍を除去して祝福の所作と、2. 会処を莊嚴して浄地の所作と、3. 曼荼羅を準備する所作と、4. 聚会導師の選定と、5. 〔会衆を〕聚会の堂廟に入れる儀則と、6. 香曼荼羅の奉献と請願と、7. 違犯した三昧耶の修復のため百字〔真言〕の觀想・誦誦の所作と、8. 危難からの守護のためにする守護輪觀想であって、〔聚輪と勇者

の饗宴の加行である〕。〔以上に挙げた〕八つの内の第一は〔以下である〕。

I 加行 (準備)

1. 会処の障碍の除去と祝福

las thams cad pa'i sngags dang gu gul gyi dud pa dang yungs kar gyis brab
pa la sogs pas / [388a] gnas khang gi bgegs pas la / bkra shis kyi tshig
su bcad pa brjod la shis par bya ste / snying po rgyan las /
bden pa'am sum rim khang pa ru // bgegs pas la shis pa rab brjod la //
zhes so

すべての行為のためのマントラ (*sarvakarmikamantra*)⁽¹⁹⁾ と安息香 (*guggulu*) の香煙と白芥子の実の撒布等によって住居のヴィナーヤカ〔による障碍〕に対して吉祥の偈頌を唱えて祝福を為すのであり、『〔秘密総儀軌〕心髄莊嚴』の中で、「人けの無いところあるいは三層の家においてヴィナーヤカ〔による障碍〕に対して吉慶讃を唱えて」⁽²⁰⁾ と言われている。

2. 会処の莊嚴と浄化

gnyis pa ni / las kyi rdo rjes phyag dar bya zhing ba'i rnam lnga dang
bdud rtsi lnga dang shing shun dri bzung po dang tsan dan sogs pa dri
bzang po'i chus chag chag bdab / bris sku la sogs pa'i rten dgram mo /
snying po rgyan las /
de nas las kyi rdo rje yis // ba yi rnam lngas regs byungs te //
dam tshig che dang ldang byas nas // shing syun la sogs dri bzung dang //
tsan dan sogs pas chag chag gdab //
ces so /

第二は羯磨金剛者が清掃をして牛五浄と五甘露と芳香の木皮と梅檀等の薫香水を撒水すべし。画像などの所依を〔地面に〕広げるべし。『心髄莊嚴』の中で「次に羯磨金剛者が牛五浄を塗布して大三昧耶⁽²¹⁾と混ぜ合わせてから木皮等の良い香りのものと梅檀などを撒布すべし」⁽²²⁾ と言われている。

3. 曼荼羅の準備

(1) 曼荼羅自体の準備

gsum pa la / dkyil 'khor 'dus bya ba dngos / gdan dang mchod pa dang
 yo byad bshams pa gnyis kyi dang po la dkyil 'khor gcig gi tshogs kyi dkyil
 'khor gyi dbang du byas pa dang / de las gzhas pa'i dbang du byas pa
 gnyis kyi dang po ni / tshogs kyi khang par lha gnas mi 'chol bar bya ba'i
 phyir rtsa thig yan chad nang gi thig gdab pa la cha legs par bgo / lha
 gnas so sor spyod bsdu sgron ma ltar na / sna tshogs pad ma bris la ras
 kyis g'yogs pa'am / snying po rgyan ltar na / ras la sna tshogs pad ma
 bris pa bsham ste / de las /

sa ni le tsher byas nas kyang // kha dog sna tshogs pa yi ras //
 pad ma'i ri mo dang ldan pa // thams cad kyi ni gdan du sbyin //
 zhes so / gnyis pa ni / sa chog sta gon la sogs pa sngon du 'gro bas tshogs
 kyi khang pa'i dbus su dkyil 'khor bri'o / sdom 'byung las /
 sngon 'gro byas te slob dpon gyis // dge ba'i dkyil 'khor bri bar bya //
 zhes so / bde mchog stod 'grel las / dpa' bo'i ston mo la dkyil 'khor bri
 bar ma nus na ba byung gis byugs pa'i maṇḍala la bsten par bshad do /

第三には、曼荼羅を撰集すること自体および座処と供物と資具〔といった必需品の準備〕であって、〔この〕二つの中の第一については、ある曼荼羅が聚会曼荼羅を核とするものとそれ以外の場合〔がある。その〕二つの〔内の〕第一は、聚会の堂廟において尊格の住処を混乱させてはいけないから、基本線と〔その〕支分である内部の線を引き、中の線を打って、部分に巧く分割すべし。尊格の住処それぞれに、『行合集灯』の如く為す場合には、「雑色蓮華を描いたならば布で覆う」⁽²³⁾あるいは『秘密総儀軌 心髓莊嚴』の如く為す場合には、「布に雑色蓮華を描いたものを準備し」、そして「地面は碁盤目に作ってから、蓮華の図絵をもつ様々な色彩の布を全員の座として与えるべし」⁽²⁴⁾とされている。

第二〔の図絵曼荼羅の場合に〕は、〔曼荼羅〕地儀軌の準備を前行としてから、聚会の堂廟の中央に曼荼羅を描くべきである。『サンヴァローダヤ』の中では、「前行を為して阿闍梨は良い曼荼羅を描くべし」とされている⁽²⁵⁾。『現誦十万所出小タントラ撰義註釈』の中では、「勇者の饗宴において曼荼羅を描くことができない場合には、牛浄物で塗布した香曼荼羅に依止する」⁽²⁶⁾と釈説されている。

(2) 曼荼羅以外の必需品の準備

① 座処の準備

gnyis pa la / gdan bsham dang / [388b] mchod pa bsham pa dang / yo
 byad bsham pa dang gsum gyi dang po la / dkyil 'khor gcig gi tshogs kyi
 dkyil 'khor dbang du byas pa yin na / dbus su mi lpags / shar dang mer
 khyi lpags / lho dang bden bral du rta lpags / byang dang dbang ldan du
 ba lang gi pags pa / nub dang nub byad du glang po che'i pags pa dus
 'khor nas bshad cing / so so pa ma rnyed na thams cad la mi lpags gding
 bar snying po rgyan las bshad do /
 dbus su dpal ldan na ra yi // pags pa ma nyams pa yi gdan //
 shar dang me la khyi yi ste // lho ru rta nyid dpa' bos gsungs //
 nus tu glang chen pags pa ste // byang du ba lang nyid yin no //
 yang na thams cad mi yi bsngags //
 zhes so / dam tshig lnga pa las /
 de nas tshogs kyi gtso bo'i gdan // ro'am stag lpags ro shun la //
 rgyan ni 'dam 'bag gis bya'o //
 zhes gsungs so / dkyil 'khor gcig gi yin yang dbus kyi rdul tshon gyi dkyil
 'khor gtso bor byas te mchod pa yin na / phyogs mtshams brgyad du
 gdan bsham ste / \bar{A} rya de va'i snying po mdor bsags las /
 phyogs brgyad kun nas bskor ba ru // kun la gdan ni phul nas kyang //
 rnal 'byor rnal 'byor ma yi gnas // gcig car lhan cig gdan la bzhugs //
 zhes so / dpa' bo dang dpa' mo'i ston mo yin na / dbus su dkyil 'khor byas
 pa'i nus tu dge slong ngam dge slong ma / lho ru dge tshul lam dge tshul
 ma / byang du dge bsnyen nam dge bsnyen ma / shar du mchod pa'i yo
 byad dang las kyi rdo rje la sogs pa 'khod par dus 'khor nas bshad pas
 gdan de bzhin du msham mo /

第二としては座の準備と供物の準備と資具の準備であり、その三つの内の第一として、ある曼荼羅を聚会曼荼羅の方軌で為す場合は、「中央に人間の皮、東と東南に犬の皮、南と西南に馬の皮、北と北東に牛の皮、西と西北に象の皮である」⁽²⁷⁾と『カーラチャクラ〔聚輪儀軌〕』では釈説されており、「各別に手に入れることが出来ない時にはすべて〔の方角〕に人間の皮の敷物である」⁽²⁸⁾と『心髄莊嚴』の中で説かれている。「中央には吉祥を具する人間の瑕疵の無い皮の座⁽²⁹⁾、東と東南には犬の〔皮〕で、南には馬の〔皮〕であると勇者がお説きになっている。西には象の皮で、北には牛〔の皮〕である。あるいはまたすべて〔の方角〕に人間〔の皮〕が勸

められる」⁽³⁰⁾と『心髄莊嚴』で言われている。『五種三昧耶』の中では、「そこで聚會の導師の座は〔人間の〕屍あるいは虎の皮と死体の皮で、飾りは泥で作った仮面で為すべし」⁽³¹⁾と説かれている。

〔次は〕ある〔図絵〕曼荼羅の場合であっても、中央の色粉曼荼羅 (*rajomaṇḍala*) を本尊と為して供養する場合には、八方向に座を用意するのであって、アールヤデーヴァの『曼荼羅儀軌心髄集』の中で、「ぐるりと八方向を回って全員に対して座を献じてから瑜伽者と瑜伽女の場所に同時に一緒にの座に住すべし」⁽³²⁾と言われている。

男女勇者の饗宴の場合には、「中央に作られた曼荼羅の西に比丘あるいは比丘尼、南に沙弥あるいは沙弥尼、北に優婆塞あるいは優婆夷、東に供養の資具と羯磨金剛者などが坐す」⁽³³⁾と『カーラチャクラ』では釈説されているので座をそのとおりに並べるのである。

②供物の準備

gnyis pa ni / rang rang so so'i gzhung dang mthun pa'i mchod pa chu
 gnyis sam gsum mam bzhi sngon du 'gro ba'i nyer spyod lnga / mchod
 bya'i lha'i g'yas nas mchod pa'i gral mgo byas la bsham / dkil 'khor lta
 bu'i mtha' 'khor [3389a] bar shong na gsang 'dus dgyes rdor lta bu la g'yas
 bskor / bde mchog gdan bzhi lta bu la g'yon bskor du bzang la rgya che
 ba bsham / yang na mdun du mchod yon zhabs bsil sogs g'yas su / me
 tog la sogs pa'i nyer spyod rnams g'yon du bsham / mdun gyi g'yon du ka
 pā la chang gis bkang ba la bdud rtsi ril bu btab pa dang / g'yas su rdor
 dril / de yang rdo rje rang gi g'yon gyi cha / dril bu g'yas gyi char gzhag
 ste / dus 'khor dang gdan bzhi las de ltar 'byung / de'ang dril bu'i zhal
 rang la bstan la gzhag go / bde mchog gdan bzhi lta bu cang te'u dgos pa
 yin na / rdor dril gyi g'yas sam mi shong na rgyab tu gzhag / dbus su
 maṇḍala bdag 'jug len na de'i rgyab tu bum pa gzhag / gtor ma rang rang
 so so'i gzhung nas 'byung ba bzhin / sha khrag sgog btsang la sogs pas
 brgyan pa'am 'bras chan / sran chen / snum 'khur la sogs pa'am / dri
 dang me tog la sogs pas brgyan pa la gdugs dang rgyal mtshan btsugs pa
 grangs rang rang so so'i gzhung nas ji ltar bshad pa bsham / grangs kyi
 dmigs bsal med pa rnams la 'jig rten las 'das pa'i gtor ma gcig / 'byung
 po thams cad pa'i gtor ma gcig / zhing skyong ngam gzhi bdag gi gtor ma

gcig ste gsum mam / sgos kyi chos skyong yod na / bzhi la sogs pa gang
 'byor dang sngon 'gro'i gtor ma dang phyi rol pa'i gtor ma dang bcas pa
 bsham ste / sdom 'byung las /
 me tog bdug pa mar me dang // dri dang tsan dan bye brag gis //
 gtor ma slob dpon gis brtag bya // gdugs dang rgyal mtshan gyis brgyan
 pa // lha ni mnyes phyir mchod par bya //
 zhes gsungs so / mchod rdzas dang gtor ma thams cad la bdud rtsi ril bu
 btab la gzhaq go /

第二はそれぞれの経儀軌と相応する二種類の水・三種類の水・四種類の水の供物を先にして、五供物を供養される尊格の右から供物の段を作り並べるべし。曼荼羅のように周縁まで入れる場合には、『秘密集会』と『ヘーヴァジュラ』の如くならば右回りにすべし。『サンヴァラ』と『四座』の如くならば左回りにして良い物を盛大に並べるべし。あるいは正面には闍伽で、洗足水などは右に、花などの〔五〕供物は左に並べるべし。正面の左にある酒を満たした鬮體杯に甘露で作った丸薬を入れる。右側に金剛杵と鈴、これもまた金剛杵は自分の左の部分、鈴は右の部分に置く。『カーラチャクラ』や『四座』の中では以上のように述べられている。その鈴もまた正面を自分に向けて置くのである。

『サンヴァラ』と『四座』の如くダマル太鼓が必要であれば、金剛杵と鈴の右側、あるいは余地がなければ背後に置くべし。中央で香曼荼羅に自身が入る場合にはその背後に瓶を置くべし。バリ〔の供物〕はそれぞれの経儀軌で述べられている如く肉・血・大蒜等で飾りつけるか、あるいは乾米・大豆・油で炒った煎餅等あるいは薫香と花などで飾りつけたものに天蓋と幢幡を立て、数はそれぞれの経儀軌の中で釈説されたとおりに並べるべし。数に例外がないものとしては、出世間のバリが一つ、一切鬼類のバリが一つ、あるいは土地神のバリが一つで〔合計〕三つであるか、あるいは修行者自身の護法神が居るならば四つなどと用意して、加行のバリと外境〔へ撒く〕バリを一緒に並べる。『サンヴァローダヤ』の中で、「花と焼香と灯明と薫香と梅檀の区別によりバリ〔の供物〕を阿闍梨がつくるべし。天蓋と幢幡で荘厳し尊格が喜ぶが故に供養すべし」⁽³⁴⁾と説かれている。供物とバリのすべてに甘露で作った丸薬を入れて置くのである。

③資具の準備

gsum pa ni / sngar gdan du bshad pa'i pags pa lnga'i [389b] sder / shing
 dang nya physis dang na ri ke la dang rdza phor dang mi'i thod pa'i btung

snod / snod so so pa ma 'byor na / thams cad la mi'i thod pas bya ste /
 snying po rgyan las /
 de lta bu yi sdal dang ni // shing dang nya phyis dag dang ni //
 na ri ke la sa yi snod // mi yi thod pa dag bsham mo //
 thun mong snod ni thod pa ste // yang na thams cad la yang shing //
 zhes so / khang pa sum rim gyi phyi mar tshang mang dang / bar bar pi
 wang la sogs pa glu dang rol mo'i mchod pa'i yo byad rnams gzhas par
 bya'o /

第三は先に座について釈説した五〔種類〕の皮の部分（座処）に、木製と真珠母貝と椰子の実と土器と人間の髑髏杯から出来た飲物の鉢〔を配るべし〕。各別の鉢が用意できなければ全員に対して人間の髑髏杯とするのである。『心髄莊嚴』の中で、「かくの如く座処に⁽³⁵⁾ 木製と真珠母貝と椰子の実と土器と人間の髑髏杯を用意すべし。共通の器は髑髏杯であり、あるいは全員に対して木製⁽³⁶⁾〔の器〕⁽³⁷⁾と」言われている。三層になった家の外〔の層〕には厨房、中の層にはヴィーナ等の歌と音楽供養の資具を置くべきである。

4. 聚会導師の選定

bzhi pa ni / de nyid bcu shes pa la sogs pa'i yon tan dang ldan zhing /
 snying rje med pa la sogs pa'i skyon dang bral ba'i slob dpon rab 'bring
 bzhi po gang rung la tshogs kyig tso bo mdzad du gsol zhes gsol ba btab
 la tshogs kyi slob dpon du bsko ste / sdom 'byung las /
 slob dpon dbang bskur yon tan ldan // 'jig rten rnams kyis sun 'byin med //
 mi dge bcu ni yongs spangs pa // tshogs kyi gtso bo dag tu bya //
 snying rje med cing khro la gdug // khengs dang brkam chags ldan pa
 dang //
 rang la bstod pa rtag tu ni // gtong ba blo ldan gyis mi bya //
 gang zhig khyim gnas longs spyod bsten // gshol tshugs dang ni tshong pa
 dang //
 rmongs dam chos 'tshong ba ni // tshogs kyi 'khor lo'i gtso bor min //
 de ltar yon tan kun ldan zhing // kun mkhyen rgyal mtshan 'dzin pa po //
 dul zhing brtson 'grus kyis yongs rdzogs // sred pa med cing nga rgyal
 med //

rtag tu sems can ltos pa bcas // legs pa slob ma rnams kyis brgyan //
 rdo rje lta bu'i snyoms 'jug dang // thod pa'i rgyan la dga' ba yi //
 g'yon ma'ang g'yon gyi logs rnams su // mkhas pa yis ni gzhag par bya //
 zhes so /

第四〔の聚会導師の選定について〕は、十眞実を知るなどの徳を具えており、無慈悲などの罪過を遠離した上位・中位・下位の阿闍梨で相応しい者に対して「聚会の導師を為さって下さい」と懇願して、聚会の阿闍梨に指名するのである。『サンヴァローダヤ』の中で、「灌頂の徳を具え世間の人たちから非難されることなく、十不善を完全に断じている阿闍梨を聚会の導師となすべし。悲〔心〕無くして怒りにまかせ、高慢と強欲を持ち、絶えず自慢する者は〔聚会の阿闍梨と〕なすべからず。在家者にして財産に執着する者・農夫・商人や愚かにして正法を売る者は聚会の導師ではない。かくの如く一切の徳を具えた者は一切智者の幢幡をもつ者である。善調で精進を完全に円満して貪欲が無く我慢が無く、不断に有情を思いやり、良き弟子たちで飾られ、金剛の如き等至⁽³⁸⁾と鬘髻の飾りを喜ぶ者、すなわち智者は左の女 (*vāmā*、印契女) を左側に置くべし⁽³⁹⁾」と言われている。

5. 入聚会処の儀則

(1) 門衛阿闍梨の指定

lnga pa la / dam tshig dang mi ldan pa 'jug dgag pa'i phyir sgo pa dgod
 pa / phyi nang kun tu las byed pa'i las kyi rdo rje dgod pa / gtsang sbra
 la gnas pa'i phyir khru bya ba / rgan rim nas 'ongs te sgo [390a] pa la
 gsol ba gdab pa / gnang ba byin nas nang du 'jug pa / zhugs nas slob
 dpon la phyag byas te bsgo ba bzhin gral du 'khod pa dang drug gi dang po
 ni / khro bo'i rgyan dang cha lugs su bsgyur ba'i dbyung / sngon can gyi
 nga rgyal bchang ba zhig sgo par bzhag la / des dam tshig dan ldan mi
 ldan brtag pa'i phyir nang du 'jug par 'dod pa rnams la / ngag gi brda
 skad dang lag pa'i phyag rgya bstan / des brda'i len dang phyag rgya'i
 lan ma shes na 'jug pa dgag cing / shes na gnang ba byin la 'jug tu gzhug
 go /

第五は三昧耶を持たない者の入所を禁ずるために門衛を定めること、内外のすべてにおいて行為する羯磨金剛者を定めること、清浄に住するための沐浴の所作と歳の順から行って門衛に懇願することと許可が与えられてから聚会処内に入ること

と住してから阿闍梨に頂礼して命令されたとおりの列に着座することである。〔以上の〕六つの〔内の〕第一は、忿怒尊の飾りと装束に扮した者を選び出し、〔十忿怒尊の内の〕*Niladaṇḍa*の我慢を具えた者⁽⁴⁰⁾一人を門衛に置く。その者が三昧耶を具えていない者を吟味するために〔聚会の堂廟の〕内に入りたいと願う者たちに言葉の符牒と手の印契を示して、言葉の符牒と手の印契の返答を知らない場合には入ることを禁じて、知っておれば許可を与えて内に入れて住させるのである。

(2) 羯磨金剛者の指定

gnyis pa ni / las kyi rdo rje rang rang gi rigs kyi khro bo gang yin na ma
thun mong du bdud rtsi thab sbyor du bskyed / las kyi rdo rje ma yin na
/ sgron ma la sogs pa bskyed de / snying po rgyan las /
rgyan dang cha lugs 'chang ba yi // dbyug sngon po ni sgo la dgod //
phyi dang nang dang thams cad du // las kun byed pa thab sbyor te //
rnal 'byor ma yi bya ba la // sgron ma la sogs nye bar dgod //
ces so /

第二は羯磨金剛者がそれぞれの部族の指導者⁽⁴¹⁾である場合には、不共の甘露を炉に準備して運び込むべし。羯磨金剛女の場合には灯明⁽⁴²⁾等を選び込むのである。『心髓莊嚴』の中で、「飾りと装束を身に着けた *Niladaṇḍa* を門に置くべし。内外の一切においてすべての役目を為す者が炉を準備する。瑜伽女の所作については灯明等を配備すべし⁽⁴³⁾」⁽⁴³⁾とされている。

(3) 沐浴の所作

gsums pa ni / dri chus kha lag legs par bkru'o /

第三は薫香水で口と手をよく洗うべきである。

(4) 門衛阿闍梨への懇願

bzhi pa ni / sdom 'byung las /
skal ba med dang nga rgyal can // de bzhin bla ma smod pa dang //
dam tshig ma mthong rang gi bu // de bshin bran pho bran mo rnams //
dngos grub 'dod pa'i sgrub pa pos // de bzhin dam tshig la mi gzhug //
gal te phyugs ni de rnams zhugs // dngos grub ring du rab tu 'jug //
dam tshig smad pa'i lus dang ni // yid la de bzhin sdug bsngal 'gyur //
gnas nyams dpal las ring ba dang // sdug bsngal du mas nye bar 'tshe //
de ltar shes nas spang bya ste // mchod bya spyod yul yang dag bsdu //
zhes gsungs pas dbang bskur ma thob pas skal ba med pa dang / thob

kyang nga rgyal can la sogs pa rnams mi gzhus cing / mchod par bya ba'i
 yul du gyur pa / sdom 'byung las /
 zhing dang sngags dang gnas skyes dang // rnal [390b] 'byor rnal 'byor
 ma slob dpon // lha rnams thams cad spyin drang bya //
 de'i 'grel bar lha'i gzugs thams cad spyin drang bya'o / zhes 'byung bas
 / me tog gang phog gi lha'i cha byad du bsgyur la / de nas las kyi rdo
 rjes 'du bar 'os pa rnams dbang gi rgan rim gyis khrid nas 'ongs te sgo pa
 la / khyod ni dam tshig la ni khro bo sngon po mdzes / dngos grub phyag
 na dbyug tho rin chen bcings pa 'dzin / kye ho dpal ldan dpa' bo 'du bar
 'khor sgrol khungs / mkhas mdzes rnal 'byor ma yi nang du'ang bdag
 thongs shig / ces gsol ba btab pa dang / dbyug sngon can gyis / kas
 tvam bho / kye khod su yin / zhes dri bar bya'o / nang du 'jug 'dod
 pas / kaliñjara / skal ldan lags / zhes lan gdab po / po tang gi phyag
 'tshal zer ba la / pra ti po tang gi slar phyag 'tshal lo / zhes pas ngag gi
 brda dang brda'i lan dang / dbyug sngon can gyis lag pa g'yon pa khu
 tshur bcangs / mdzub mo bsgrengs te ston pa / 'ongs sam zer ba la /
 g'yon pa'i gung mo dang mdzub mo gshibs nas bsgrengs te bstan nas /
 'ongs so zhes lan 'debs pa la sogs pa phyag dang phyag rgya'i lan mi shes
 na / phyir bskrad cing / shes na / las kyi rdo rjes khyer 'ongs pa'i bsang
 chu'i bum pa nas bsang gtor bya'o /

第四〔の門衛阿闍梨への懇願と〕は、『サンヴァローダヤ』の中で、「福分の無い者、我慢を持つ者、あるいはグルを侮蔑する者と三昧耶を未だ得ていなければ自分の息子であっても、同様に下男・下女たちを成就を願う修行者は、三昧耶に入れてはならない。もし家畜をその三昧耶に入れるならば悉地は遠のいてしまう。三昧耶を誹謗するが故に身体と意についても同じく苦となるであろう。聚会処を損ない、吉祥から遠ざかり多くの苦によって懊悩する。かくの如くと知って〔こうした人々を〕断ずべきであり、供養される対象を集めるべし」⁽⁴⁴⁾と説かれている。その故に灌頂を受けておらずに福分が無い者や受けていたとしても我慢などを持つ者たちを〔聚会処に〕入れてはいけないのである。供養される対象となるのは『サンヴァローダヤ』の中で、「*kṣetra* と *mantra* と *pīṭha* に生まれた瑜伽者と瑜伽女の阿闍梨と尊格たちのすべてを招請すべし」〔と説かれている〕⁽⁴⁵⁾。その註釈では、「尊格の姿をした全員を招請すべし」⁽⁴⁶⁾と述べられているので、〔会衆〕は花を着けた尊格の装

束に扮する。次に集まって来た者たちが灌頂の年次の順で羯磨金剛者に導かれてやって来て、門衛〔阿闍梨〕に、「汝、三昧耶を〔歛ぶ〕麗しい忿怒〔尊〕 *Niladaṇḍa* よ、宝石を結んだ杖を手に持つ成就者よ。嗚呼、吉祥を具えた勇者よ。集会は輪廻から済度する源である。虚空〔の如く〕美しいお方よ、瑜伽女の内に我を入れ給え⁽⁴⁷⁾と懇願する。*Niladaṇḍa*〔役の阿闍梨〕は「*kas tvam bho*（嗚呼、汝は誰か）」と訊ねるべし。内に入りたい者は「*kaliñjara*（福分を持つ者です）」と返答する。「*potāṅgi*（頂礼）」と言われたところで「*pratipotāṅgi*（頂礼の返し）」と言うのである。〔こうした〕言葉による符牒とお返しの符牒、および *Niladaṇḍa*〔役の阿闍梨〕が左手で拳を縛し、立てた人差し指を示して、「やって来たのか」と言ったところで、左の中指と人差し指を並べ立てて示してから「やって来ました」と返答するなどの印契と印契の返答を知らない場合は、外へ追放し、知っておれば〔彼らを聚会処の〕内部に呼び入れて、羯磨金剛者が運んできた洗浄水の瓶から灑浄すべし。

(5) 許可の授与後に入門

lṅga pa ni / dbyug sngon can gyis /
 'di ni chos rnam bzang por ltos // med pa'i sgom pa dor bar gyis //
 bram je khyi dang gdol pa gsum // rang bzhin gcig pa nyid du zo //
 zhes bsgo la / nang du 'jug tu gzhug go /

第五は、*Niladaṇḍa*〔役の阿闍梨〕が「今や諸法は甚深であると見よ。存在もしない想念は捨てよ。婆羅門と犬とチャンダーラの三者は自性が全く同じであるとして食べよ」と命令して内に入れて着座させるのである。

(6) 入門後の着座の規定

drug pa ni / nang du zhugs te slob dpon gyi zhabs la phyag byas / me tog
 phul / mchod yon drang ngo / de nas las kyi rdo rjes byin pa rnam la ji
 ltar rnyed pa'i dri'i chu gtsang mas zhabs bkrus la / gral gyi thob thang
 legs par brtags pa'i gnas su 'dir bzhugs zhes bsgo'o / des kyang der skyil
 krung bcas te 'dug par bya'o / [391a] snying po rgyan las /
 dri yi chus ni khru byas te // las kyi rdo rje yongs bskul nas //
 dbang gi thu bo gang yin nas // rim gyis sgo drung 'ongs nas kyang //
 rnal 'byor ma nang bdag thongs sogs // dbyug sngon po la gsol btab nas //
 'du ba'i khang par legs 'ongs te // slob dpon la ni phyag byas la //
 bsgo ba thos nas gral la 'khod //
 ces dang / sdom 'byung las /

spyin drangs rim pas byon pa yi // slob dpon dang ni lha rnam la //
 ji ltar rnyed pa'i dri yi chu // gtsang mas zhabs ni bkrus byas te //
 yongs su brtags pa'i gnas su ni // bcug nas gdan la gnas par byas //
 zhes so /

Do mbi he ru kas / slob dpon dbus su / dpa' bo g'yas gral / dpa' mo g'yon
 gral du byas pa ni / rten dge slong lta bur mtshungs pa'i dbang du byas
 pa'o /

第六は、〔聚会処の〕中に入って〔会衆である男女瑜伽者は〕阿闍梨のみ足に頂礼し、花を献じて、鬘伽を差し上げるべし。次に羯磨金剛者がやって来た者たちに得た限りの清浄なる薫香水で足を洗って、よくしつらえた列の相応しい場所で「この場所に居なさい」と指示するのである。その〔指示された〕者はその場所で結跏趺坐を組んで住しているべし。『心髓莊嚴』の中で、「薫香水で沐浴させて羯磨金剛者が勧発して灌頂の上臘から順番に門の傍に行くのであるが、『瑜伽女の中に我を入れ給え』などと*Niladaṇḍa*〔役の阿闍梨〕に懇願してから集会の堂廟に入って来て阿闍梨に頂礼した上で、指示を聞いてから列に着座すべし」⁽⁴⁶⁾とされており、『サンヴァローダヤ』の中で、「招請した順にやって来た阿闍梨と尊格たちに対して得られた限りでの清浄なる薫香水で足を洗淨して、よくしつらえた場所に入れて座に住させる」⁽⁴⁹⁾とされている。ドーンビヘルカが「阿闍梨は中央に、男性勇者は右の列、女性勇者は左の列に〔着座する〕」⁽⁵⁰⁾と言っているのは拠り所 (*āśraya*) が比丘と等しい者に限るのである。

6. 香曼荼羅の奉献と請願

drug pa ni / 'du ba rdzogs pa dang / las kyi rdo rjes / sngon 'gro'i gtor
 ma chang dang chu dang byin gyis brlabs pa'i nang chod dam bdud rtsi ril
 bus bran / phyag byas te sngon 'gro'i gtor ma bsngo bar zhu zhes gsol /
 tshogs kyi gtso bos rang rang gi gzhung nas 'byung ba'i 'byung po thams
 cad pa'i gtor ma cho ga ji lta ba bzhin du bsngos te 'phrin las bcol la mjug
 tu / rdo rje 'chang gis sangs rgyas kyi bstan pa dang bstan 'dzin pa'i
 gang zag rnam srung zhing skyong bar bka' bsgos pa bzhin zhal gyis
 bzhes pa'i srung ma dam tshig can khyed rnam kyi bdag che ge mo zhes
 bgyi ba / yon bdag che ge mo'i don du tshogs kyi 'khor lo'am / dpa' bo'i
 ston mo'i cho ga byed pa la cho ga'i bya ba mthar ma phyin gyi bar du

bsrung zhing bskyab pa dang / byang chub ma thob kyi bar du stongs
 grogs mdzod cig / ces 'phrin las bcol / gsang spyod lta bar mi dbang ba'i
 'byung po gnod pa dang gdug pa'i sems 'chang pa rnams 'dir ma 'dug par
 songs shig ces brjod la / las thams cad pa'i khro bo'i sngags dang [391b]
 rol mo'i sgra drag po dang bcas pas bskrad do / gong gi khang pa'i bgegs
 bskrad kyang 'di dang lhan cig byas kyang rung ngo / de nas rang rang
 gi gzhung bzhin mchod pa rnams bsangs sbyangs byin gyi brlab / tshogs
 kyi khang pa'ang gzhal yas khang du byin gyi brlab / bla re dang gdugs
 dang rgyal mtshan dang gdan cha sogs kyang lha rdzas las grub pa'i yo
 byad du byin gyis brlab bo / Nag po pas gsol ba btab pa rjes su / lce lag
 dang / rdo rje dril bu dang / mchod pa byin gyis rlob par bshad do / slob
 dpon nas brtsams te rnal 'byor pho mo re re'i mdun du maṇḍala rdzogs pa
 re re phul / so so'i phyag tu me tog phul / phyag byas te me tog dang
 bcas pa'i thal mo sbyor nas /

sems can don du sems dge bas // rnal 'byor rnal 'byor ma rnams kun //
 tshul bzhin cho ga ldan pa yis // rnal 'byor la ni nyer gnas mdzod //
 ces gsol ba gdab ste / snying po rgyan las /
 dpa' bo dpa' mo rnams rdzogs nas // re re yi yang mdun nyid du //
 dkyil 'khor rdzogs par dbul bar bya // de nas las kyi rdo rje yis //
 rab dang bas ni phyag byas nas // kun la gsol ba gdab par bya //
 sems can don du zhes sogs so //

de ltar re re nas maṇḍala dbul bar mi nus na / bod kyi bla ma'i phyag
 bzhes kyis / phyag byas te phyir maṇḍala bsham / phyag byas te so so'i
 phyag tu me tog dbul / phyag byas te gsol ba gdab / phyag byas te bla
 ma ma gtogs pa'i me tog bsdus / phyag byas te maṇḍala bsham / phyag
 byas te gzhan rnams kyi me tog bla ma la dbul pa'i phyir maṇḍala bla ma
 la phul / bla mas kyang gzhan rnams kyis phul ba'i maṇḍala dang rang gi
 me tog bla ma gong ma la dbul ba'i phyir me tog maṇḍala kyi dbus su
 spungs la rten gyi drung du gzhang / phyag byas te rang gnas su 'khod
 do / de nas tshogs kyi slob dpon gyi / nyon mongs pa dang ma 'dres shing
 dga' ba dang dad pa dang ldan pa'i / [392a] sems kyis dpa' bo dang rnal
 'byor ma thams cad mnyes pa'i cho ga mdzod / ces pa'i don nying po

rgyan las /

chags dang de bzhin sdang ba dang // khengs pa med pa'i sems kyis su //
mgon po rdzogs sangs rgyas kun dang // rnal 'byor ma rnams rab mnyes
kyis // kun la dga' dang ldan par mdzod //

ces pa 'di brjod do / slob dpon gyis rdo rje dang bcas pa'i dri bzung po
dang bdud rtsi sbyar bas spyi bo mgrin pa snying ga gsum du byin gyi
brlab / me tog gi phreng ba'i thod dang ga shar byas te / Ḍo mbhi he ru
kas /

de nas slob dpon bdag nyid gyis // rdo rje dang bcas thig le yis //

lus ngag yid kyi gnas gsum du // kun la byin gyis brlab par bya //

de bzhin me tog phreng mchog gis // thod dang ga shar rnam par brgyan //
zhes so /

第六は〔会衆が〕集まり終わって、羯磨金剛者が加行のバリ〔の供物〕に酒と水と加持した内供物あるいは甘露の丸薬を注いで頂礼して、「加行のバリを廻向願います」と申し上げる。聚会の導師が各々の経儀軌で述べられている一切鬼類へのバリ儀軌どおりに廻向して事業を頼んだ末尾で、「持金剛が仏の教法と教法を受持する人たちを守護するよう命じたとおりに誓約した守護母神の三昧耶を持つ汝らが、誰某と言われる私が、施主である誰某のために聚輪あるいは勇者の饗宴の儀軌を実行するに当たり、儀軌の所作の間は守護し救護して、菩提を得るまでは助伴を為せ」と唱えて事業を頼み込むべし。「秘密行の如きに関係しない危害を加える鬼類と有害な心を持つものたちがここには居ないように為し給え」と唱えてすべての行為のための忿怒のマントラと強い楽の音と共に放逐すべし。先述した堂廟のヴィナーヤカ放逐もまたこの〔偈頌や音楽〕と一緒にを行うのも理に合っている。

次に各々の経儀軌の如くに諸供物を洗浄し清浄と為して加持し、聚会の堂廟あるいは本尊壇上で加持すべし。華蓋と天蓋と幢幡と座具等もまた尊格の財物から成った資具として加持すべし。クリシュナは、「懇願された後で〔金剛阿闍梨は〕舌と手と金剛杵と鈴と供物を加持すべし」⁽⁶¹⁾と釈説している。阿闍梨から開始して男女瑜伽者が各人の前で円満した香曼荼羅をそれぞれが献ずべし。各人の手にある花を献ずべし。〔羯磨金剛者は〕頂礼を為して花を持った〔手で〕合掌してから「有情のために善なる心によって瑜伽者と瑜伽女たちの皆さん。理趣どおりの儀則を持つ者が瑜伽に親近を為し給え」とお願いする。『心髓莊嚴』の中で、「男女勇者たちは〔着座し〕終わってから、各々の前で曼荼羅を円満して献ずべし。次に羯磨金剛者が恭

しく頂礼を為してから全員にお願いする。『有情のために』云々⁽⁵²⁾ など〔と唱えるの〕である。このように〔会衆〕各人から香曼荼羅を献ずることが出来ない場合には、チベットのグルの作法により頂礼して共同の香曼荼羅を用意すべし。頂礼して各人の手にある花を献ずべし。頂礼して懇願すべし。〔羯磨金剛者は〕頂礼してグルのもの以外の花を集めよ。頂礼して香曼荼羅を用意すべし。頂礼して他の者たちの花をグルに献じた後で香曼荼羅をグルに献ずべし。グルもまた他の者たちが献じた香曼荼羅と自分の花を最上のグルに献じた後で花を香曼荼羅の真中に積み上げて本尊の近くに置くべし。頂礼して自分の場所に着座すべし。

次に「聚会の阿闍梨が煩惱の混じっていない歓喜と浄心を具えた心で勇者と瑜伽女全員が喜ぶ儀則を為される」という意味は、『心髄莊嚴』の中で、「貪欲も瞋恚も高慢も無い心で本尊と一切の等正覚と瑜伽女たちの歓喜により全員について歓喜を持たせ給う⁽⁵³⁾」とこのように述べられている。阿闍梨は金剛杵を持ち薫香水と甘露を混ぜ合わせて頭頂と喉と胸の三処で加持すべし。華鬘の冠と瓔珞を作るのであり、ドーンビヘルカは、「そこで阿闍梨自身が金剛杵を持ち心滴で身口意の三処で普く加持すべし。同様に最勝の華鬘で冠と瓔珞を飾るべし⁽⁵⁴⁾」と述べている。

7. 違犯した三昧耶の修復

bdun pa ni / rjes su gngang ba thob nas dam tshig thams cad dran par bya
ste / nyams pa gso ba'i phyir rang rang gi gzhung nas 'byung ba'i yi ge
brgya ba'i sgom bzlas dus 'khor gsang 'dus lta bu la rdo rje sems dpa'i yi
ge brgya pa / bde mchog gi skor lta bu la he ru ka'i yi ge brgya pa sogs
rang rang gi gzhung dang mthun par byas la / mjug tu mngon brjod bla
ma las 'byung ba ltar /

bdag ni mi shes rmongs pa yis // dam tshig las ni 'gal zhing nyams //
bla ma mgon pos skyabs mdzod cig // gtso bo rdo rje 'dzin pa ste //
thugs rje chen po'i bdag nyid can // 'gro ba'i gtso la bdag skyabs mchi //
zhes bshags bsdams byas la rgyud dag par bya'o /

第七は続いて許可を得てからすべての三昧耶を憶念すべきである。〔三昧耶の〕違犯を修復するために各々の経儀軌で説かれた百字〔真言〕の観想と読誦は、『カーラチャクラ』と『秘密集会』の如くならば、金剛薩埵の百字〔真言〕、『サンヴァラ』の結社の如くならばヘルカの百字〔真言〕等それぞれの経儀軌に応じて為す。〔マントラ読誦の〕終わりで『Abhidhāna最上タントラ』の中で述べられている如

く、「私は無知蒙昧の故に三昧耶に違犯いたしました。グルである尊主が救護し給え。導師で持金剛にして大悲を自性とするお方よ。有情の尊主に我は帰依いたします」と懺悔の律儀を為したところで〔心〕相続を清浄と為すべし。

8. 守護輪の観想

brgyad pa ni / rang rang gi gzhung nas 'byung ba'i srung 'khor rgyas par
bsgoms la sngags bzlas te bdud tshar gcad / sngags med pa rnam la ting
nge 'dzin gyis bdud tshar gcad par bya'o /

第八は各々の経儀軌で述べられた守護輪を広大に観想してマントラを読誦し、魔を調伏すべし。マントラの無いものたちについては三摩地によって魔を調伏すべし。

略号

SU津田本 Tsuda, S. *The Saṃvarodaya Tantra Selected Chapters*, Tokyo, 1974.

RBTS Rare Buddhist Text Series, Central Institute of Higher Tibetan Studies in Sarnath, Varanasi.

参考文献

桜井宗信「*Kriyāsaṃgraha* 所説のガナチャクラ儀礼」『智山学報』50、2001.

静 春樹「仏教タントリストの飲食による成就」『高野山大学密教文化研究所紀要』17、2004a.

「仏教タントリストが口にするもの：飲食による「即身成仏」について」『京都精華大学紀要』26、2004b.

「聚会曼荼羅 *gaṇamaṇḍala* 考」『密教文化』212、2004c.

田中公明『チベット密教』春秋社、1993.

羽田野伯猷「チベット人の仏教受用について：Rwa 翻訳官と *Vajrabhairavatantra* の度脱をめぐって」『羽田野伯猷 チベット・インド学集成』第一巻、法蔵館1986.

註

(1) Toh 蔵外5067, Tshogs kyi 'khor lo dang dpa' bo'i ston mo'i lag len gyi cho go, Bde chen rnam rol zhes bya ba.

(2) [静2004b].

(3) [静2004a].

(4) [北村1995].

(5) [桜井2001: 32].

(6) Toh 1793『灯作明密意明』Khi. 142a6.

rol ba ni snyoms par zhugs pa'o / tshim par byed pa ni dga' bar byed pas so /
 「遊戯」とは等至である。「満足させる」とは歡喜させることによってである。

- (7) Toh 2486『金剛乘根本過失広積』には、三昧耶の違犯を修復する儀軌があり、違犯の軽重に従って、護摩・バリ・読誦・懺悔・聚輪の回数が述べられている。
- (8) SU津田本p. 97 (4-6). Toh 373 Kha. 273b1-2.
- (9) SU津田本p. 99 (21-22). Toh 373 Kha. 274b4-5.
- (10) 阿閼金剛三十二尊曼荼羅を指す。[田中1987:190].
- (11) 文殊金剛十九尊曼荼羅を指す。[田中1987:196].
- (12) 『二儀軌』では九尊曼荼羅が有名である。[田中1987:212~214]. これに主尊の配偶尊である *Nairātmyā* の役割の瑜伽女を加えて合計で十名となる。
- (13) サンヴェラ六十二尊曼荼羅を指す。[田中1987:219~222].
- (14) 身口意具足時輪曼荼羅を指すと考えられる。[田中1987:238~242].
- (15) Toh 1402 Ba. 116a2-5取意。およびToh 1198 Cha. 303b4-5.
- (16) Toh 1402 Ba. 117a3取意。
- (17) Toh 1224 Ña. 27a1-2取意。
- (18) SU津田本p. 96 (2-3). Toh 373 Kha. 273a7-b1.
- (19) [森1991: 1022] によれば、「アムリタクンドリンのマントラ」のことであり、「儀礼の中で用いられる道具や儀礼に参加する人などに対してとなえられ、対象の浄化、除災を目的とする」。
- (20) Toh 2490 Zi. 239b2.
- (21) 大三昧耶とは、本来的な意味での「五甘露」つまり人体の排泄物五種を指すと思われる。
- (22) Toh 2490 Zi. 239b2-3.
- (23) RBTS 22 p.82.
- (24) Toh 2490 Zi. 239b3.
- (25) 筆者には、この引用箇所が不明である。
- (26) Toh 1402 Ba. 117a1.
- (27) Toh 1393 Pha. 60a4-5.
- (28) Toh 2490 Zi. 239b4.
- (29) テキストには *dpal la na ra yi* とあり、『心髄莊嚴』は *dpal ldan na ra le* とある。
- (30) Toh 2490 Zi. 239b3-4.
- (31) Toh 1224 Ña. 27a5.
- (32) Toh 1613 Ya. 132a3.
- (33) BIBLIOTHECA INDO-TIBETICA SERIES No.VI, p.146.
- (34) SU津田本p.98 (18-19) Toh 373 Kha. 374a2-3.
- (35) テキストに出る *sdal* は *stan* のケアレミスと考えられる。
- (36) テキストに出る *shes* は *shing* のケアレミスと考えられる。
- (37) Toh 2490 Zi. 239bb4.
- (38) 『サンヴェローダヤ』では、*vajraghaṅṅāsamāpannaḥ* である。
- (39) Toh 373 kha. 273b3-6, Tib 訳およびプトゥンの引用は不正確であり、訳文はSU津田本

pp.97~98 (7-12) により訂正。

- (40) Toh 426 *Vajrārali-mahātantrarāja* Na. 175a7.
dpal ldan dbyig pa sngon po ni // sgo srung ba yi bdag po nyid //
- (41) テキストには khro bo とあるが、gtso bo の誤りと思われる。
- (42) テキストに出る sgröl ma は sgron ma のケアレスミスと考えられる。
- (43) Toh 2490 Zi. 239b5.
- (44) SU津田本p.98 (15-17).
- (45) SU津田本p.96 (4).
- (46) Toh 1420『*Ratnarakṣita* 有蓮華』 Wa. 29b1-2.
- (47) Toh 1607『四座 *Bhavabhadra* 註』 Ha. 206a3-b2取意。
- (48) Toh 2490 Zi. 239b5-7.
- (49) SU津田本p.98 (13-14).
- (50) Toh 1231 Na. 43b2-3.
- (51) Toh 1955 Mi. 81a7.
- (52) Toh 2490 Zi. 239b7.
- (53) Toh 2490 Zi. 240a1-2.
- (54) Toh 1231 Na. 43b3.

<キーワード> プトゥン、ガナチャクラ（聚輪）、勇者の饗宴、聚会曼荼羅、金剛乘